



Title	K・ペンデレツキの音楽作品における死と生のダイナミズム：クラスター作法の意味論
Author(s)	黄木, 千寿子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44768
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	黄 木 千 寿 子 <small>おう き ち ず 子</small>
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 8 3 2 4 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	K・ペンデレツキの声楽作品における死と生のダイナミズム—クラスタ —作法の意味論—
論文審査委員	(主査) 教授 根岸 一美 (副査) 教授 上倉 庸敬 教授 森谷 宇一 京都女子大学助教授 秀村 冠一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代ポーランドの作曲家クシシュトフ・ペンデレツキ(1933～)の声楽作品におけるクラスタ作法の意味論についての研究である(譜例目次・資料目次・論文梗概・Summary : xvii 頁; 本文・ペンデレツキ作品リスト・参考文献 : 145 頁)。

本文は「序章」、「第 1 章 ソノリスティカークラスタの原形質」、「第 2 章 様式引用の問題」、「第 3 章 音と言葉の関係」、「第 4 章 詞の多元性が意味すること」、「第 5 章 《ウトレニア I》に見る死と生の表象」、そして「終章」からなる。

第 1 章では、1960 年ごろからのペンデレツキの作曲様式の根幹となっているクラスタを歴史的に考察し、その起源として、一般に考えられている電子音楽やポスト・セリアリズムの所産という考え方に加え、ポーランドの音楽学者ホミニスキが 1956 年に提唱したソノリスティカ概念を提示する。そして、この概念自体は、当初は単に「音響という価値が前面に出された作法」という意味にすぎなかったが、彼の 1968 年の論文以降、ポーランド音楽の特殊性を語る言葉として、ポーランド国内に浸透していったことを指摘するとともに、ペンデレツキの原クラスタが前言語的に有する「恐れを感じる」こそが、変質したソノリスティカの、第 1 の姿であると論じている。

第 2 章では、以上の原クラスタのなかに過去の様式が取り込まれ、新しい様相が見られるようになった段階について、Z・リッサの「引用」概念を援用しつつ考察を進める。とりわけ 1962 年の《スタバト・マーテル》においては、グレゴリオ聖歌風の旋律や、ルネサンス風のポリフォニー、3 和音といったものが、祈祷や天的なもの、歓喜や希望といった元来のイメージを抱きつつクラスタと対峙し、時にはクラスタに取り込まれ、さまざまなレヴェルにおいて緊張そして弛緩の関係を形成していることを指摘する。そして、それは 2000 年前の出来事なのではなく、われわれにとってのリアルタイムな体験であり、作曲家の言によれば 20 世紀のアウシュヴィッツやサラエヴォの受難を投影することなのだとして主張してゆく。

第 3 章では、クラスタ作法における音と言葉の問題が、J・クリステヴァのル・サンボリックならびにル・セミオティック概念を援用することによって考察される。そして、詞の分解や変形によって多義的とされ、あるいは全く意味の聴取を不可能とされた詞においてもなお、言葉の意味が音楽化された形で存在し、もとの詞では表現し難い

ような深い幻想をもたらすことを説いてゆく。

第4章では、1965年の《ルカ受難曲》を例に挙げ、詞の多義的様態の具体的表れと、その意味するところを追究し、これらの多義的様態そのものが、実は死と生、「殺戮の死」と「生への扉としての死」という死の二つのフェイズを表現しているという考察にいたる。そして、ペンデレツキにおいては次第に後者が前面に現れるようになってきていることを楽曲分析を通じて明らかにしている。

第5章では、1970年の《ウトレニア I》において、クラスターにおける3和音とその断片である3度音程により、光の表象としての機能が獲得されていることを述べ、ここではクラスターと対峙していた過去の様式がクラスター内部の出来事に変貌し、光の表象が入りこんでくることによって、希望の死、絶対他者へと向かう死への転換が起こることが述べられる。

そして終章では、これまで論じてきたペンデレツキのクラスター作品の多義性の意味が、彼の出自と生い立ちから問い直される。多元的志向は、彼の血筋に基づく東西キリスト教、さらには他宗教に対する、彼の宗教的寛容と平衡感覚にその土台を見ることができ、20世紀のポーランドが被った悲惨な体験は、彼に死のテーマをもたらさざるをえず、平和と自由への強い思いが彼の作品に霊性の復権を促すことになった、と説いてゆく。そして、ペンデレツキの作品において「死」が「殺戮の死」から「生への扉としての死」へ転化することは、安逸で予定調和的な信仰ではなく、現実的苦難を体験した者の、深い淵からの祈りとして考えることができる、と結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、《広島犠牲者に捧げる哀歌》(1960)でわが国でも著名な存在となったポーランドの作曲家ペンデレツキの、声を伴う作品についての意味論的探究の試みであり、同作品のもつ顕著な様式的特徴としてのクラスターがその後の作品においてどのような様態と意味を有するにいたったのかについて、深い追究と解釈を行った研究である。もともと芸術系の大学において作曲専攻の大学院にまで進み、少なからぬ音楽作品を書いている申請者が4年余の歳月をかけて完成させたこの仕事は、音楽作品の解釈を楽曲分析のみならず、現代の哲学・記号論やさらには20世紀ポーランド史への考察、そして東西キリスト教についての思索等、さまざまな観点を取り込んだ総合的な性格のものであり、ペンデレツキの作品の現代的な意味を改めて浮き彫りにした、きわめて意欲的かつ緻密な論考と評価することができる。本論文においては、作曲家の表現意思と受容の側からのテキストの純粋な読みとのせめぎ合いが、また作品における歌詞に示される明示的な意味と歌詞の解体・複合による意味の曖昧化・多義化の問題が複雑に絡みあっているが、そうした問題設定のなかにペンデレツキの作曲の独自性を探ろうとした申請者の試みは十分に成功したといえるであろう。2004年2月12日に行われた公開口頭審査においては、ソノリスティカという、本来方法論であったものが、表現内容の問題に転化していることについての疑義や、クリステヴァ等の哲学を援用することの妥当性についての懸念、また、本来もっと扱うべき作品があるのではないかという指摘、さらに、譜例の呈示の仕方等、いくつかの問題点が挙げられたが、申請者はこれらの問いに対して的確に答え、あるいは研究者としてふさわしい解答を示すことができた。本論文については、主題となる作曲者が現存の人物であり、作曲家研究の観点から、なお実証的・歴史的研究の展開も課題であろうが、これらの点は、近い将来において解決されるものと思われる。よって本論文を博士(文学)の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。